

佐喜眞淳市長が 退任



平成24年2月に宜野湾市長に就任し、2期6年7ヵ月にわたり市政を担い、「宜野湾がいちばん」を合言葉に都市(まち)、人、未来づくりに貢献した佐喜眞淳市長が、市議会(大城政利議長)の同意を得て退任しました。8月17日、市役所玄関前で行われた退任式では、大勢の市民や職員が参加し、温かい拍手を送りました。

佐喜眞市長は「これまで市政運営を滞りなく行うことができたのも、市民をはじめ職員のご理解ご協力の賜物であり、市長として光栄に存じます。深く皆様方に心より感謝を申し上げます。長い間ありがとうございました」と述べ、参加した方々と握手を交わし市役所を後にしました。

退任のご挨拶

私は、平成24年2月12日の市長選挙で当選して以来、これまで2期6年7ヵ月にわたって市政を担当させていただききました。この間、多くの市民のご理解を得ながら、職員の皆様と共に、順調に市政が運営できましたことに心から感謝申し上げます。

振り返りますと、私の市長就任時は、「市民と市政との絆」を大切に、「安心安全なまちづくり」を基本理念とし、「市民との協働」や「開かれた市政運営」に取り組むことでした。本市最大の課題である普天間飛行場の閉鎖・返還を実現するための取り組み、市民一人ひとりが幸せを感じ、宜野湾に住んでよかった、宜野湾がいちばん!だと実感できるまちづくりに取り組んでまいりました。

また、第4次宜野湾市総合計画の策定にあたり「人がつながる未来へつなげるねたてのまち宜野湾」を将来都市像として掲げ、市民と行政が協働するまち、健康で安心して住み続けられるまち、文化を育み、心豊かな人を育てるまち、地域資源を活かした活力のあるまち、安全・快適で持続的発展が可能なまち、平和をつなぎ、未来へ発展するまちの6つの目標を定めて取り組んでまいりました。

そのなかでも、米軍基地普天間飛行場の閉鎖・返還に向けて訪米要請行動を行いながら基地返還に取り組み、平成27年には西普天間住宅地区を返還させ、今年の3月には土地の引き渡しを終えることが出来ました。同地域は国から「拠点返還地」の指定を受け、今後の跡地利用のモデルケースとなる沖縄

健康医療拠点として琉球大学医学部及び同附属病院が移設されることとなりました。

そして、平成2年から四半世紀以上にわたり、事業が中断していた、市道宜野湾11号の道路整備及び中原進入道路道路整備事業を再開させ、普天間飛行場があるが故の慢性的な交通渋滞の緩和と地域の生活環境の改善に取り組んでまいりました。さらに、跡地利用に伴う将来の財政需要に備え、未来を担う人材育成に活用するため、昨年7月1日の市民の日に「普天間未来基金」を創設しました。この基金の活用の1つとして今年度は、中学生の短期海外留学派遣にかかる旅費を全額公費負担で対応することができ、アメリカのホワイトハウスや国防総省などを視察することができました。

そのほかにも、各種補助メニューを活用しながら、公共施設・地域公民館の改修工事や公園・道路整備事業に取り組んだほか、こども医療費助成事業の対象年齢引き上げや、認可保育園の創設などの子育て支援事業、こどもの貧困対策や小学校の給食費助成事業など数々の施策に取り組んでまいりました。

このように2期6年7ヵ月を通じて、多くの施策を充実させていくことができたのは、何よりも市民のご理解と、ご協力の賜物であり、ここに衷心より感謝を申し上げます。宜野湾市の今後益々の発展と、皆様のご健勝とご多幸を心からお祈りいたしまして、退任の挨拶といたします。

第16・17代 宜野湾市長

佐喜眞 淳

※「退任のご挨拶」については、市長が述べられた挨拶から、一部抜粋して掲載しております。